

現代に生きるデューイ

21世紀を生きる私たちの世界において、デューイの教育思想と実践を問うことに、どのような意味があるのだろうか

デューイは、今日の教育や学びの場で普及している様々な実践、例えば、アクティブ・ラーニング、探究的な学び、対話的な学び、協同的/協働的な学び、問題解決・課題解決学習、生活教育、経験主義/プロジェクト学習、laboratoryの学び、学び合い/学び続ける/学びを学ぶ、振り返り/反省的思考、リフレクション、批判的思考/クリティカルシンキング、論理的思考/ロジカルシンキング、横断的・総合的な学習ワークショップ、サービスターニング主権者教育、シティズンシップ教育、多文化主義/多文化教育、平和教育、環境教育、SDGsの学習、コミュニティースクール、ダッシュュ専門家の共同体/学校・家庭・地域の連携とパートナーシップなど

の思想的なループとなる人物として、あるいはそれらと深い関わりのある人物として見なされる傾向がある

しかし、もしそうだとすれば、私たちの時代の教育の実践や政策は、留意の層から多大な影響を受けていると考えられないだろうか

結論から言うと、これがすべての教育実践の原点にデューイの哲学と議論があったと示すものではない

また、私たちの世界で広く取り入れられている教育や学びの実践を無批判に前提として、そこからデューイの思想を捉え直そうとするのでもない

むしろ、彼の思想を起点にして現在の、そして、我々これからの教育と学びについて探求し、それらの**哲学と実践と政策の対話を開く何らかの手掛かりを示す**ことができたなら、と考えている

ところで、今日、**民主主義と教育をめぐる情勢は重大な転換点を迎えている**

Ai(人工知能) IOT(物のインターネット)、ビッグデータ、ロボットなどの新技術を活用した第四次産業革命の進展は、人間の労働や学習のあり方に根本的な変容を迫り、私たちの**生き方や学び方そのものに対する新たな問いを突きつけている**

また、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う世界的なパンデミックに際しては、人々の自由や権利が制約され、移動や社会的交流が制限され、私たちの生活の**安全や安心にも甚大な影響が生じた**

さらに、今日のグローバルな世界を取り巻く状況は、社会的な**寛容と分断の深化・格差と貧困の拡大、ポピュリズムと権威主義の浸透、国際紛争と地域対立の激化**をはじめ、深刻な問題に見舞われてもいる

一方で、そのような中でも**様々な技術革新や社会のイノベーションが生まれ、市民的な自由・権利・平等・公正・参加・多様性を尊重する働きが活発化**することで、多様な人びとがお互いに支え合い、分かち合い、対話し、共生する**社会の創造に向けた教育、営みの変革が**

促されてきたことも事実である

これからの**教育と学びをどのように構想するか**、私たちの**希望や幸福の実現へと向かう質の高い教育をどのように準備するか**

よりよく生き、よりよく学ぶことで、より良い社会や世界を作ることへの問いは、グローバルな次元で持続可能な未来を展望する上で、不可欠な**教育課題**になっている

日本の教育もまた大きな変化を遂げている

第二次世界大戦後、日本は民主的で文化的な国家の建設を期として、教育と学びの改革を追求してきた

子ども中心の新教育や戦後民主主義の下で、**経験主義**、**問題解決学習**、**生活単元学習**、**地域教育**、**コアカリキュラム**が導入される過程では、**デューイの教育思想**がさまざまな影響を与えてきた

1960年代以降の高度経済成長期には**教育科学化**や**現代化**が目指され、**評価**、**学問中心のカリキュラム**が浸透した

知識重視の学力や能力主義的な教育観が折檻するに従い、**デューイの思想**は**経験主義**を代表する**教育**として**批判**にさらされてもきた

だが、1990年代以降、改革に生きる力の育成や**学習者中心の教育**が提唱される中で**デューイの思想**が**再評価**され、**注目**されてきた

このように教育をめぐる議論は、**教科か子どもか**、**知識か関心か**、**科学か生活か**、といった二項対立の下で論争が繰り広げられ、**実践や政策**を方向づけてきた

近年では、**社会的な課題解決**や**汎用性**、**主体的な学び**、**資質能力（コンピテンシー）**が重視され、**社会が求める能力やニーズの観点から教育を改善しようとする傾向**も顕著である

アクティブ・ラーニングや**探究的な学び**といった子どもまた一連の改革と実践のプロセスから提起されてきたものである

デューイの哲学が示唆するものは、そのうちの一方が**民主的**で他方が**非民主的**であるというような結論を導くことではない

それどころか、このような「あれかこれか」の二元論的な世界観を取り直し、再考し、新たな**教育と学び**を**デザイン**し、**創造**することそれ自体に、彼の**思想的意義**があった

デューイは「**民主主義と教育**」のテーマについて探求し続けた

彼はコモン・マン、すなわちごく**普通**で**一般の人**が**世界の中でよりよく生き、よりよく学ぶ**ことで、より良い**社会**を作ることに関係する**在り方**について考えた

それは、私たちの誰もが**社会**から取り残されることなく、**他者と共に生きる**、**民主的**で**持続可能な世界**に向けた**教育のビジョン**を示すものであった

プラグマティズムと**進歩主義**の思想はデューイの思想を理解するのに欠かせない部分を構成するものである

それは、**主体と客体**、**個人と社会**、**精神と身体**、**観念と行為**といった二元論の克服を意図す

るものであってもあった

その挑戦は、相互の信頼、公正、正義に向けて、多様な市民の自由と権利を保障し、異なる考えや意見に対する寛容や対話を尊重することによって、開かれた多元的な社会の形成に寄与する理想を伴っていた

この理念は、シカゴ大学実験学校や多くの進歩主義学校での革新的でクリエイティブな実践に取り入れられた

デューイは、子どもや生徒が批判的に思考し、探求し、表現し、対話する学びを導入するとともに、家庭、地域、自然環境、大学、図書館、博物館、研究機関へと開かれ、社会生活と有機的につながるコミュニティとしての学校を組織しようとした

そして、教育の目的は成長にあるととらえ、経験の意味を増大させ、経験を共有し、再構成するプロセスについて論じた

アクティブな学びや探究的な学び、対話的なコミュニケーション、問題解決プロジェクト、laboratory、リフレクション、コミュニティとしての学校をはじめとする活動は、その中心となるものだった

彼はまた、様々な政治活動、社会活動、教育やアートの実践にかかわる教育と哲学と社会を大きく変革することに貢献した

デューイは、アメリカを代表し 19 世紀後半からは多岐に至る世界を代表する「コモン・マン」の哲学者であり、教育学者であった

その思想と実践は、生きること、学ぶことを基礎にした「民主主義と教育」の哲学に支えられたものだった

デューイが残した思想と実践の痕跡は、過去と現在と未来をつなぐ確かな魅力と輝きを発し続けていると言えるだろう

デューイの思想を、それが生まれた政治的、社会的な文献や思想的交流に着目しながら、なるべく広範囲に、かつ今日の先端的な教育の議論も視野に入れて記しようとした

中でも、デューイの思想が私たちの時代の教育に問いかける課題を中心に、彼がそれらにどう向き合い、どのように応答していったかを論じるように心がけ、

一方で、こうした意図から本書に登場する人物や思想、社会状況について、読者にとって必ずしも馴染みのあるものばかりとは限らず、難解な内容も含まれる結果になったことも否めない

デューイは 92 年間の生涯で約 40 冊の著書と 700 本以上の論考を書き残した

それらは南イリノイ大学出版からデューイの著作集として出版されている

国内では、これまでに数々のデューイの翻訳書が出版されてきたことに加え、現在、東京大学出版会より「デューイ著作集」の刊行が進められてもいる

これまでに学校と社会他、何かこう改革、明日の学校他、改革 12 の翻訳出版に役者代表と

して関わっており、そのことが本書の執筆を進める上でも貴重な手掛かりを与えてくれた今日デューイやプラグマティズム、進歩主義についての研究は、アメリカ、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、南アメリカ、アメリカをはじめ、世界各地の大学やカレッジ学会研究所教育学術機関で活発に展開され、**グローバルなネットワークが構築されている**

自身も大学院生の頃より南イリノイ大学、カーボンレールデューイ研究センター、ドイツのケルン大学デューイセンター、イタリアのフェデリコ二世ナポリ大学で研究センター、ポーランドのヤゲロニア大学ジョン・デューイ研究センター、ハンガリーのセゲト大学ジョン・デューイ研究センター、ヨーロッパデューイ財団中央ヨーロッパプラウド町ストフォーラム、オランダプラグマティズム財団、おおうプラグマティズムネットワーク、ブラジルのサンパウロパトリック大学プラグマティズム研究センター、中国の負担大学デューイ研究センター、国際プラグマティズム学会ジョン・デューイ学会など各地の研究機関や研究者の訪問や交流セミナーなどへの参加を通してして多くの示唆を受けてきた

日本でも 1957 年に発足した日本デューイ学会は(現在 2022 年 7 月)約 320 名の会員から構成され、個人の名前を学会名に関する学会としては極めて大きな規模であるといわれている

同学会では、年一回の研究大会の開催やジャーナルの刊行の他、2016 年に「民主主義と教育」刊行 100 周年記念を祝う動きが広まり、2020 年に勁草書房より約 50 名の執筆者からなる「民主主義と教育の再創造、デューイ研究の未来へ」を出版するなど精力的な研究が蓄積されていて継承されている

このように**グローバル時代の今日、デューイの思想は、新たな脚光を浴びて国際的に研究が進められている**

それらは世界のさまざまな国や地域で「学校と学び」に反映され、**豊かな教育実践と政策を支えている**

デューイの思想と背景をより深く知ることで、今日広く浸透し、流行している教育や学びのあり方を表面的に取り入れるのではなく、**その根底にある哲学・歴史に学びながら、教育について契機となることに貢献できれば幸いである**